



わたしは、この世界と人々に、とても興味がある。

たえず好奇心をもつて接しているので、ときどき誤解される。まわりの人間たちが、ひよっとしたら、自分は愛されているのではないかと思ひ込んでしまうのだ。

もちろん、かれらのことなど少しも愛していない。興味があり、観察するが、ただそれだけのこと。

ふだん注目を浴びることが少ない人間ほど、微笑みと見張った瞳で観察されると、舞い上がってしまう。くだらぬ自説を滔々と述べ始めたり、自分がいかに大物が見せびらかすために威張ったりと、なかなか大変なことだ。

わたしはゆるやかに微笑みながら、気を引きたくてたまらないかれらを観察し、そのとき感じた情動とともに正しく記憶する。

それ以上の興味がわかなければ二度と会うことはないだろう

し、何らかの目的に使えるかもしれないという感触を持てば、しばらくつきあってみるかもしれない。

わたしは社交好きだが、友人は数えるほどしかない。

友人とは、親しみを感じる人間のことである。

ある友人は、わたしが食いつめて腹を空かせている時にかぎってごちそうしてくれる。食いつめているときは苦悩も大きいので、そういう勇気づけはともありがたい。

もっとも、食事をむさぼるわたしのうれしそうな様子に相手はとても満足しているから、食事を供するという行為はそこでチャラになっている。

その上、かれらはわたしを、たびたび抱きしめる。

食事をおごる喜びを供して、さらに抱かせてあげているのだから、その限りにおいてわたしたちは同等であり、恩義を感じる必要などまったくないと思うのだ。

\*

「ほんとにこの子、たくさんオツパイ飲むわ」

「大食らいの女に育ったら、男に好かれないぞ」

ママは、ほほえんだ。

「あら大丈夫よ。この子は、きっと美人になるもの」

「くそう、よその男にとられるのもシヤクだなあ」

パパは、ママの乳房に吸いつくものをじっと見た。

「なんか……吸血鬼みたいに吸ってるな」

ママはパパを見た。

「娘にむかってひどいこというわ」

「だって、動物みたいだぜ」

「だって、動物だもの。生きてくためには、なんだっていただ

くわよ」

「おまえとおんなじか」

「どういうこと？」

「先月の洋服代、ありやいったい何だ？」

「いいじゃない」

「よくないよ、いったい誰が稼いだ金だと思ってるんだ」

「あなたよ。でも、使うのは、あたし」

そして、さわがしい声にびっくりした赤ん坊にまなざしを戻した。

「いいのよ」

ママは猫なで声でわたしに言った。

「いっぱい吸っていいのよ、可愛い子はいっぱいもらいましょ、ねええ赤ちゃん……」

食事をおごってくれる連中の他に、ときおり夜中に訪れてくる友人がいる。

最初、わずかに開いた窓から風とともに入ってきた時、かれは悲しんでいた。

わたしは、カンだけはすぐれている方だと思う。

かれのために風はわずかに湿り気をおび、悲痛の匂いをためていた。

悲しみや苦痛やさびしさに、わたしは惹かれる。やさしさや笑いや怒りもふくめて、あらゆる情動にとても敏感なのだ。

夜中の友人は贈り物をくれた。

それは手鏡のようなものだった。

かれは声のない声で説明してくれた。

これは、世界を照射するだろう

わたしにはよくわからないが、かれは以前、暗い空を指さして、われわれは大マゼラン雲からきた と言ったことがある。

ほとんど外に出たことがないので、ダイマゼランウンがどこにあるのか知らない。花見に連れていってもらった、シャクジイコウエンよりも遠いのだろうか。

かれにもらった手鏡は、枕の下にかくしておいた。

ひるま使ってみると、鏡が太陽の光りを集めて力になるということがわかった。

小さな鏡は、天に輝いている星からエネルギーをもらって放つのだ。

向かいの家が焼け落ちるのを見ながら、わたしは昼の友人に抱かれていた。いつも食事をおごってくれる両の豊かな乳房が興奮して、ふるえているのがわかった。

長らくわたしは強烈なオレンジ色に照り返されていた。  
いく晩かがすぎ、ある日の明け方、かれがやってきた。  
やはりさびしそうな様子で言った。

この星で話を通じるのはおまえだけだ  
どうしてそんなにさびしそうなのか、たずねると、かれは答えた。

もうじき、この星はわれわれに滅ぼされるというのに、そのことを知ってるのはおまえだけだからだ  
滅ぼされるとはどういうことかとたずねると、それは死ぬことだという。

わたしはまだ死んだことがないので、よくわからない。  
じきに、われわれの船が地球を攻撃するだろう  
なぜかとたずねると、地球人は考える力が強いので、ノイズがともうるさいのだそうだ。それはたとえば暗い海で船乗り

を惑わす海<sup>セイレーン</sup>の魔物のように、航行する船を難破させてしまうという。

それで安全のために始末するよう、命令されてやってきたのだそうだ。

わたしはその晩、友人として贈り物で返礼した。  
手鏡のお礼に、わたしが愛しているものを贈った。

”愛“とは、わたし以外のものに、わたしが感染することだ。  
かれにプレゼントしたのはヌイグルミの子供の豹である。  
それは手垢にまみれ、ところどころほころびて中綿がはみ出していたが、ずっと大事にしてきた分身のようなものだ。  
かれはその贈り物を喜んだようだった。

そして告げた。

おまえが生命をまっとうするまで、命令は延期することにしよう

\*

「おかしいわねえ……ないわ」

「何がないんだ？ またイヤリングでも落つことしたのか」  
新聞から目を上げずにパパ。

「ちがうわよ、ベビーベッドの中にずっとあったでしょ、この子の大好きなヌイグルミ……」

「ああ、あのうす汚れたやつか」

「お気に入りだったのよ。あれがなくちゃ夜も眠れないくらいだったのに」

「掃除機で吸い込んだんじゃないのか」

ママは突然、変な声を上げた。

「なにこれ！」

小さいがずっしり重い手鏡を赤ん坊の枕元から取り上げると、  
ジツとのぞきこむ。

「あらまあ、素敵な鏡。こんなの見たことないわ、もらっちゃ  
おう、ねえあなた……」

パパは返事もしないでコーヒーを飲んでいる。

わたしは泣き出したが、ママは気づかない。

朝の光りが差し込んでくる。

やがて、ママの顔が溶け出す。

（終わり）



=====

ネオテニー

「I feel」1995年  
SUMMER / 紀伊国屋書店

=====

著者・著作権者：大原まり子  
制作：スタジオ KEI/MARI

ohara.mariko@nifty.ne.jp

<http://www.bekkoame.ne.jp/~ohara/welcome.htm>

本文書の一部あるいは全部を無断で複写・複製・転載  
をすることは、著作権法上認められている場合を除き、  
禁じられています。